



**Shinichi Sawada**  
**澤田 真一**  
 1982年～ / 滋賀県在住

澤田さんは少女のようにしなやかな細長い指で、ひとつひとつの小さな棘をゆっくりと植え付けてゆきます。時おり本当に嬉しそうににっこりして、黙々と制作しています。静かな時間と緑の空気に満たされた彼の陶作場は、滋賀県の山奥にある窯場です。

彼のこの不思議な造形は、何かをイメージしているのか、それともその時の直感的な思いつきなのかは不明です。しかし、既に完成形が見えているのかと思うくらいに、なんの迷いもなく制作は淡々とスピーディーに進むのです。大きい作品も4～5日で仕上げてゆき、作品はいくつかのテーマに分類できますが、サイズや形状は様々です。でき上がった作品たちは、施設の担当スタッフによって、まる3日間ほど薪を燃やして窯で焼かれ、自然や偶然の炎によって赤茶色の濃淡が色付けられてゆくのです。窯から出た彼の作った生き物たちは、ひっそりと山の窯場の暗い棚に、何体も並んでいます。トゲトゲしているのに、なんともユーモラスな愛らしさ。その不可思議な存在感の魅力で彼の作品は多くのファンを持っています。

この粘土造形によって、自閉症の彼が、1人で空想世界の中を自由に飛び回り、至福の時を遊んでいるのがよくわかります。それはどこにもない、自分だけが生み出した造形美の宇宙なのです。

彼は、言葉で自分を表現することはありませんが、彼の作品は海外を含む多くの作品展で、世界中の人々を魅了しています。もの静かな彼の作り出すものが、異文化の欧米の人々の心をひきつけてしまうのは、文化や歴史を超えた何か、人を揺り動かすからなのでしょう。(はた よしこ)



【無題】2006-2007年  
 陶土、自然釉  
 421×215×202mm



『まさとさん』2011年  
 陶土 200×550×240mm  
 (作品写真提供:やまなみ工房)



**Kazumi Kamae**  
**鎌江 一美**  
 1966年～ / 滋賀県在住

鎌江さんが作る不思議な形の陶芸作品は、まるで全体が米粒のような小さなツブツブでびっしりと埋めつくされた、驚きのカタチをしています。以前は、別の方法で粘土造形をしていたのですが、ある時から、指先で小さく丸めた粘土をくっつけてゆくことが面白くなったようです。そして、この方法がすっかり気に入ったのか、その小さな粒はどんどん小さくなってゆき、ほとんど米粒くらいになっていったのです。

こうして作り続けているうちに、彼女はどんどん無心になってゆき、今までにないほど集中していくようになったようです。他のことを何も考えないで没頭していくことは、私たちも実際やってみると本当に気持ちが良いものです。指先の感覚の心地良さと、次々と埋め尽くしていく達成感が、彼女の気持ちの後押しをしていったのでしょうか。こうしてこの不思議な作り方は、今やすっかり彼女自身のユニークな方法となっています。

また、もうひとつ驚いてしまうことに、これは彼女が大好きな1人の男の人を作っていることが多いのだそうです。それが誰かは内緒ですが、でも、こんなに熱意のこもった思いを寄せられる男性は、幸せですね。

(はた よしこ)



『まさとさん』2009年  
 陶土 335×244×215mm  
 (作品写真提供:やまなみ工房)